

国語 一

受験番号	
氏名	

一. 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「双葉の両親(健一さんと美樹さん)はもうすぐ離婚し、ばらばらに暮らすことになる。最後に、家族で三泊四日の北海道旅行へ出かけた。」

ロープウェイに乗るのに、どれくらい時間がかかったかわからない。

気がつくと、自分のおなかのあたりに、小さな女の子の頭があった。ロープウェイの中は、こんなに乗せても大丈夫なのかと思うくらいに混雑していて、その子は「ママ? ママ、どこ?」と不安そうな声をあげている。

「大丈夫よ、こっちにいるから」

少し離れたところから、赤ちゃんを抱いた女のひとが声をあげている。

「ママ、どこ? ママ?」

だけどその子はママが見えなくて、今にも泣き出しそうだ。

双葉はおもわず、その子の頭に手を置いた。①その子が急に静かになって、双葉のほうに顔をあげる。

「もうすぐだから、大丈夫だよ」

本当は頂上まで、あとどれくらいなんて知らないくせに、双葉はそう言ってその子の頭を a ヤサしくな だた。

「お姉ちゃんの手をつなごうか」

双葉はそう言うと、返事を待たずにその子の手をとった。手をとられたその子は、きよとんとした顔で双葉を見上げて言葉をうしなっている。双葉はその子の右手をほわっと両手で包んだ。手袋をとおして、その子の体温が双葉に伝わる。

「すみませーん」

その子のママが、笑顔で双葉に向かってさらさらした髪を揺らして頭をさげている。

「よかったねえ、お姉ちゃんにちゃんとつかまってるのよ」

そう言われても、その子はきよとんとした顔のまま双葉を見上げていた。

② 大丈夫だからね

双葉はできるだけ優しい笑顔をつくってそう言ったけれど、それはその子というより、自分にかけて言葉だった。

大丈夫。大丈夫。大丈夫。

それはさつきからずっと心の中で、繰り返している言葉だった。

大丈夫。大丈夫。大丈夫。

本当は全然、大丈夫じゃないから繰り返している言葉だった。

誰かにつかまらないと、立っていられないくらいに双葉の心は不安で、そして震えていた。だからその子の手を b 握った のは、けっして親切心からなんかじゃなくて、誰かにつかまりたかったからだ。誰かに、触れたかったからだ。

包んだその手の持ち主は、ひとりぼっちで怯えているのも、つかまえてもらっているのも、実は双葉のほうだったことを見ぬいているみたいいきよとんとした顔で、双葉を見上げつつづけている。

ずっと、大人ぶってごまかしてきた。

ずっと、見ないようにしてきた。

③ 美樹さんのこと。健一さんのこと。自分のことさえも。

美樹さんが自分に興味を持ってくれないことだって、ずっと前からわかっていた。話しかければ、なんでも聞いてはくれる。だけど、いつだって、話しかけるのは自分のほうで、学校のこと、友達のこと、どんな本が好きで、将来の夢はなにかな...全部、自分から言い出さなきゃ、美樹さんは自分のことをなにも知らうとしてくれなかった。

そして、ホテルのベッドでぶつぶつ文句を言っていたあの言葉は、夢でも幻聴でもない。あれが美樹さんの c ホンネ なのだ。美樹さんは興味がないどころか、娘の自分のことが好きじゃないのだ。それが現実の美樹さんと自分の関係だ。

健一くんのがキラいなのだって、ウザいからじゃない。美樹さんを、この家族を、ちっとも幸せにしてくれていないからだ。美樹さんの笑顔の写真を一枚も撮れないくせに、それでも美樹さんのうつむいている写真ばかりをアルバムに残して、

国語 二

受験番号	
氏名	

それで、満足している。家族でどこかに出かけようと誘っても、いつでも美樹さんの気持ちを尊重して、結局出かけることはなかった。双葉のことを第一には考えてくれなかった。親なら普通「子供のために」家族でお出かけくらいするものだ。けど、健一くんが大事にしているのは、いつだって美樹さんであって、双葉じゃないのだ。双葉はそんな父親としての役目をきちんと果たしてくれていない健一くんのが、ずっと不満だった。

そして自分は。実はちつとも大人になんかなれてないってこと。むしろ④迷子の子供みたいにも不安を感じていて、びくびくして生きている。誰といっても……親友の約束をかわしたヤッコでさえも、本当はどこか心地が悪い。そして唯一、ホットできる場所はカギがしまつて、ひとひとり分のスペースしかないトイレ。

トイレなら、誰にも見られない。どんな自分をも、隠すことができるから。

これはもう、はつきりとした事実で、だからこそそんな自分であることがばれないように、昔から、明るくノリよく、ひとと接してきた。

そのためには、努力をおしまなかった。

クラスでは⑤していても、変に目立っていじめられたりしないようにいつも謙虚に振る舞った。手芸部で仲良かったヤッコには、特別に明るく接して、その結果「親友」の約束をかわすことに成功した。勇矢が自分を気にしていることを感じとってからは、さりげなく気のあるそぶりをみせた結果、コクられて付き合うことになった。勉強だってガリ勉にならない程度にこつこつと努力した。自分の進むべき道がわからなくなってAおろおろしないように、なぜか英語が他の科目より成績がいいという理由で、将来の夢を「通訳」か「翻訳家」と決めた。

双葉は女の子から手を離して、手袋をはずした。

はずした手袋を右手で持って、左手でヤケドのあとをなでてみる。

この傷だって、ずっと変だと思っていた。

ポットのお湯で、どうやったらこんな変にきれいな形のヤケドのあとが残るのか、おかしいと思っていた。

お湯をこぼしたのなら、手の甲だけじゃなくて全部がただれているはずだ。だいたい近くに美樹さんがいたなら、すぐに手当てすればポットのお湯程度で、こんなひどい傷あとにはならないはずだ。

だけど、そんな疑問を美樹さんに投げるなんて、できなかった。

本当のことを知るなんて、そんな怖いことできなかった。

でも、もうごまかせない。

いい夫であり、自分のことをすごく好きになってくれた健一くんをゲットしても、美樹さんは救われなかった。幸せにはなれなかった。ということとは、双葉だって同じことになる可能性があるということだ。自分を親友だと思ってくれているヤッコがいて、自分を好きでいてくれる勇矢がいる。そんな条件だけをそろえても幸せにはなれないのだ。現に、この追い詰められた状況で、ヤッコとの楽しいメールも、勇矢との明るい電話も、ちつとも自分の助けにならなかった。

「イターイー」

⑥気がつくど、女の子が双葉に向かって顔をしかめていた。いつのまにかまた、その子の手を握っていて、チカラが入ってしまっていたらしい。

「手が痛いよお！」

双葉はあわてて、その子の手を離した。

「ごめんね、大丈夫？ ごめんね」

現実にはひきもどされた双葉は、あわてて。アヤマった。ちょうどロープウェイが頂上についたようで、動きが止まる。

「あっ、ほら、到着だあ。」

チラチラと双葉を見ている周りの視線を気にして、明るく振る舞う。

ロープウェイのドアが開いて、ひとがばらばらと押し出されていく。双葉も流れにのってその子といっしょに、おもてへと押し出される。

「ママー」

国語 三

氏名	受験番号

女の子が駆けよって、ママに抱きついている。
 「どうも、ありがとうございます」

ママは、その子の手をしっかり握ると、さらさらとした髪を揺らして双葉に笑顔に向けた。双葉も笑顔をつくって頭をさげる。

頂上は、強い風が吹いていた。その風は冷たいなんでものじゃなくて、痛かった。ちょうどそのとき、携帯がバイブしたのがわかった。きつと勇矢からだ。さっき話していたガ克蘭姿の写メールを送ってくれたのだろう。きつと双葉を笑わせようと、変なポーズで撮った写真を送ってくれたに違いない。双葉をおもしろがらせるために、喜ばせるために。

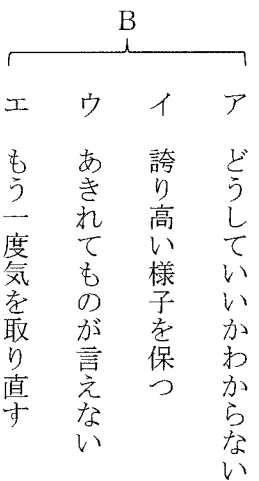
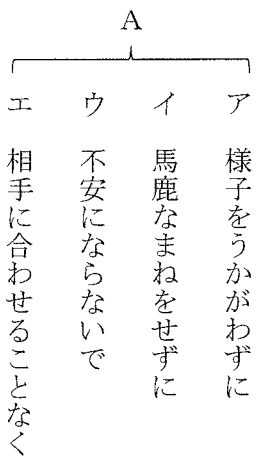
① だけど、双葉はもう、それを見る元気さえなかった。携帯をカバンからとりだすことなく、人混みにまぎれて歩き出す。風が双葉の頬を叩きつけてくる。北海道の風に頬をひっぱたかれながら、双葉はただ B 呆然とするばかりだった。

(草野たき『メジルシ』より)

(句読点や符号は、すべて一字分と教えて解答下さい。)

問一 線 a e のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。

問二 線部 A 「おろおろしない」・B 「呆然とする」の意味として、最も適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。



問三 線①「その子が急に静かになって、双葉のほうに顔をあげる」とあるが、ここから読み取れる女の子の気持ちとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 自分に優しくしてくれた双葉を、信頼している。
- イ どうしたら手が払いのけるか、必死にもがいている。
- ウ 知らない人に手を置かれて、戸惑っている。
- エ 自分を混雑した状態から守ってくれて、安心している。

国語 四

受験番号	
氏名	

問四 線②「大丈夫だからね」とあるが、このときの双葉の本当の気持ちをまとめた次の文の I・II にあてはまる語句を、それぞれ指定字数で文中から抜き出して答えよ。

この言葉は同乗した女の子に掛けたものではなく、本当は I 二字 でたまらないので、誰かにつかまっていなくて立ってられないくらいだったから、その女の子の手に II 六字 というのが、双葉の本当の気持ちだった。

問五 線③「美樹さんのこと。健一くんのこと。自分のことさえも」とあるが、その内容をそれぞれの人に分けて説明した次の文の I・IV にあてはまる語句を、それぞれ指定字数で文中から抜き出して答えよ。

美樹さんは双葉に I 五字 だけでなく、好きでもない。一方、健一くんは美樹さんのことは II 七字 けれど、双葉に対しては III 八字 を果たしていないことに不満を感じている。このため双葉は、誰といても IV 八字 思っているために、明るくふるまっている。

問六 線④「迷子の子供みたいに」に用いられている表現技法として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 対句法
- イ 省略法
- ウ 擬人法
- エ 直喩 ちよくめ
- オ 隠喩 いんめ

問七 本文中の ⑤ には、文中からの一続きの七字を抜き出して答えよ。

問八 線⑥「気がつく」とあるが、ここで双葉は我に返っている。ここまで双葉は自分だけの考えに沈んでいたのだが、それが描かれている初めと終わりの十字を抜き出して答えよ。

問九 線⑦「だけど、双葉はもう、それを見る元気さえなかった」とあるが、その原因として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 左手にできているヤケドのあとの原因が分かってきたので、それが事実であるかどうかをしっかりと確認しようと考えたこと。
- イ 親友のヤッコや好きでいてくれる勇矢がいても、美樹さんと健一君と同じように幸せになれないことをわかってしまったこと。
- ウ 美樹さんと健一くんがもうすぐ離婚することで、ばらばらな暮らしになるが、新しい生活が始まると感じて、強く生きていこうと思うこと。
- エ 明るく振る舞うようにしてきた今までの生き方を、これからも続けていくか、それとも自分の地を出して生きていくかどうかを悩み始めたこと。

国語 五

受験番号	
氏名	

二、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

人間は毎日生活している間に、「あれ、ふしぎだな」と思うときがある。それにも小さきまがまがあり、ふしぎだと思いつつすぐ心から消えてしまうのと、あくまでそのふしぎさを追究していきたくなるのと、相応に程度の差がある。

非常に簡単な例をあげよう。夜中にふと目を a さますと、ビーンと変な小さい音が聞こえる。「あれ、ふしぎだな」と思う。それが気になって眠れない。とうとう起きだして、音を頼りに調べてみると、「なあーんだ、冷蔵庫の音だったのか」とわかつて安心する。「ふしぎ」ということは、人間の心を平静にしておかない。「わかった」という解決の体験があつて平静に戻る。

電車に乗っていると、赤い帽子に赤い靴、鞆まで真赤という服装のおじさんが乗ってくる。「あれ、ふしぎな人」と思うが、おじさんがどこかで降りてしまうと、「変な人だったな」と思い、それで忘れてしまう。この際は、「わかった」というところはないが、「変な人」ということで、自分の人生にかかわりのない b 事柄として、心の中から排除してしまうことにより、心の平静をとり戻す。

せっかく平静をとり戻したのに、翌日まったく違うところで電車に乗っていると、また例のおじさんがやってきた。こうなるとそのままではおれない。「偶然だ」、「あんな服装流行しているのかな」、「あのおじさん、僕をつけているのかな、まさか」などと心がはたらきはじめる。 A、人間というは、「ふしぎ」を「ふしぎ」のままでおいておけない。何とかして、それを ①「心に収めたい」と思う。

大人になって毎日同じようなことを繰り返していると、あまり「ふしぎ」なことはなくなってくる。何もかもわかったような気になると、今度は面白くなってきて、「ふしぎ」なことを c ティキョウしてくるテレビ番組や催しものなどを見る。これらは必ず「ふしぎ」なことが最後には心に収まるようになってるので、少しの間心をときめかして、後は安心、ということになる。

「ふしぎ」の反対は「あたりまえ」である。大人はだいたい「あたりまえ」の世界に生きている。ところが、それを「あたりまえ」と思わない人がいる。

リングが木から落ちるのを見て、「ふしぎだな」と思った人がいる。この人はそれだけではなく、その「ふしぎ」を追究していった、最後は「万有引力の法則」などという大変なことを見つけ出した。リングが木から落ちることは、それまで誰にとっても ②「」のことだったのに、ニュートンにとっては、それを「心に収める」のに大変な努力が必要だった。そして、彼の努力は人類全体に対する大きい貢献として認められた。

「人間は必ず死ぬ」。これもあたりまえのことである。しかし、これをあたりまえとは思わず、「人間はなぜ死ぬのか」と考え続けた人がいる。釈迦牟尼は、それを心に収めるために、家族を棄て、財産も棄てて考え抜いた。彼の努力の結果、仏教という偉大な宗教が生まれてきた。これも人類に対する偉大な貢献となった。

このように考えると、 ③「ふしぎ」と人間が感じるのには実に素晴らしいことだと思われる。特に他の人たちが、「あたりまえ」と感じていることを「ふしぎ」と受けとめる人は、なかなか偉大である、と言えそうである。

こんな人はどうだろう。この人も「人間が死ぬ」という「ふしぎ」に心をとられた。それを解決しようとして、仏教やキリスト教や、あれこれの本を読んだ。しかし、どれにも満足できないので、何かにつけて他人に問いかけるようになったし、この大きい「ふしぎ」に取りつかれているので他の仕事があまり手がつかなくなった。そして残念ながら、この人は周囲の人たちに敬遠され、ますます d コドクになって心の状態までおかしくなってきた。 B、この人は、「嫌われ者」になつてくる。

「他の人はごまかして生きているのに、自分だけが考えるべきことを考えている」などというので、こんな人はますます嫌われる。それは「ふしぎ」を自分の力で心に収めることをしないでただではなく、せっかく平安に生きている人の心を乱すので嫌がられるのである。「ふしぎ」と思ったからには、自分でそれを追究していく責任がある。

子どもの世界は「ふしぎ」に満ちている。小さい子どもは「なぜ」を連発して、大人に叱られたりする。しかし、大人にとってあたりまえのことは、子どもにとってすべて「ふしぎ」と言っているほどである。「雨はなぜ降るの」、「せみはなぜ鳴くの」、あるいは、少し手がこんできて、飛行機は飛んで行くうちにだんだん小さくなっていくけど、なかに乗っている人間はどうなるの、などというのものもある。これらの「はてな」に対して、大人に答を聞いたり、自分なりに考えたりして、子どもは、

国語 六

氏名	受験番号

自分の知識を貯え、人生観を築いていく。

〔中略〕

子どもは「ふしぎ」と思う事に対して、大人から教えてもらうことによって知識を吸収していくが、時に自分なりに「ふしぎ」な事に対して自分なりの説明を考えつくときもある。子どもが「なぜ」ときいたとき、すぐに答えず、「なぜでしょうね」と問い返すと、面白い答が子どもの側から出てくることもある。

「お母さん、せみはなぜミンミンと鳴いてばかりいるの」と子どもがたずねる。

「なぜ、鳴いているんでしょうね」と母親が応じると、

「お母さん、お母さんと言って、せみが呼んでいるんだね」と子どもが答える。そして、④自分の答えに満足して再度質問しない。これは、子どもが自分で「説明」を考えただろうか。

それは単なる外的な「説明」だけでなく、何かあると「お母さん」と呼びたくなる自分の気持ちもそこに込められているのではなからうか。だからこそ、子どもは自分の答に「納得」したのではないだろうか。そのときに、母親が「なぜって、せみはミンミンと鳴くのですよ」とか、「セミは鳴くのが仕事なのよ」とか、答えたとしても「納得」はしなかったであろう。たとい、せみの鳴き声はどうして出てくるかについて「正しい」知識を供給しても、同じことだったろう。そのときに、その子にとって納得のいく答というものがある。

「そのときに、その人にとって納得がいく」答は、「物語」になるのではなからうか。せみの声を聞いて、「せみがお母さん、お母さんと呼んでいる」というのは、すでに物語になっている。外的な現象と、子どもの心のなかに生じることがひとつになって、物語に結晶している。

(河合隼雄『物語とふしぎ』より一部省略あり)

(句読点や符号は、すべて一字分と数えて解答しなさい。)

問一 線 a～e のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。

問二 A・B にあてはまる最も適切な言葉を、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

- ア こうなると
- イ にもかかわらず
- ウ たとえば
- エ つまり

問三 線①『心に収めたい』とあるが、「ふしぎ」を「心に収める」ためには、何が必要となるか。これより前の文中から一続きの十四字で抜き出して答えよ。

問四 ②にあてはまる語句を、文中から五字で抜き出して答えよ。

国語 七

受験番号	
氏名	

問五 ———線③『ふしぎ』と人間が感じるのには実に素晴らしいことだ」とあるが、筆者がこのように感じる理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 「人間はなぜ死ぬか」を考え続けると、仏教やキリスト教のような偉大な宗教が必ず生まれるから。
- イ 「ふしぎ」を追求することで、人類に対する大きい貢献をもたらすことができるから。
- ウ 「ふしぎだ」と思えることに何度でも出会っているうちに、「あたりまえだ」と思えるようになるから。
- エ 「ふしぎ」を心の中に収め、平安に生きている人の心を乱さないように努力するから。

問六 ———線④「自分の答えに満足して再度質問しない」とあるが、子どもが満足するような答えを筆者はどのように考えているか。これを説明した次の文の **I**・**II** にあてはまる最も適切な言葉を、それぞれ指定字数で文中から抜き出して答えよ。

母親が「正しい」知識を駆使して説明しても、その子にとって **I** 五字 答えになっ
ていなければ、その子の心に **II** 五字 とがひとつにならないので、物語として結晶することはないから。

三、次の各文の□に漢字一字を入れて、——線部の三字熟語を完成させよ。

例 山の斜面にぶどうの□樹園がある。 果（樹園）

- ① 選挙演説には拡声□を使う。
- ② 国と地方公共団体の役所を官公□と言う。
- ③ 落語家は座□団の上で正座をして話を始める。
- ④ この事件の□後策を、講じる。
- ⑤ その本の筆者の主張は□頭言に言い尽くされている。